

西も東も、それに南も

やはり、エネルギーの安定供給には多様性が重要

日本エネルギー経済研究所 計量分析ユニット 研究主幹 | 柳澤 明

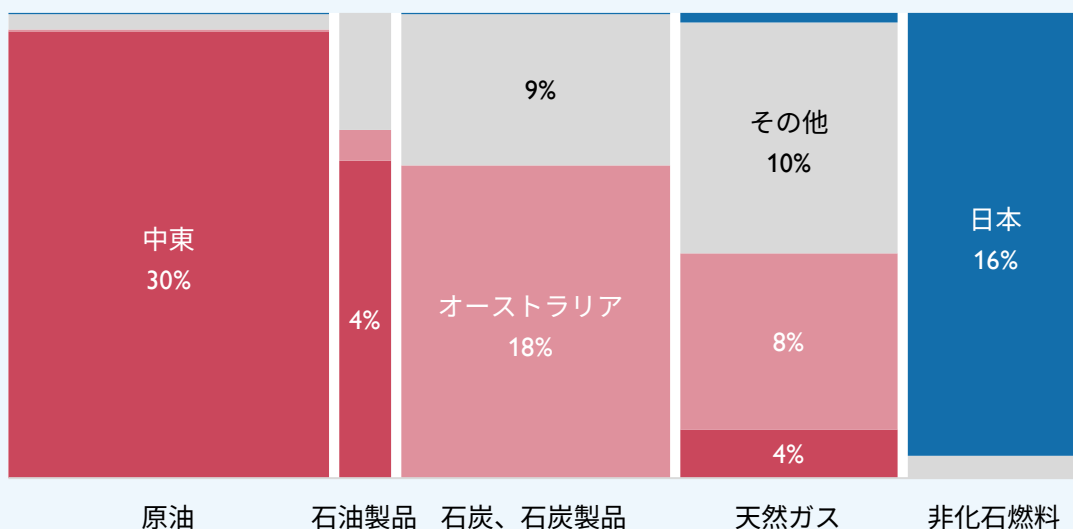
要旨

ホルムズ海峡の封鎖で日本は難題を突き付けられた。1970年代の石油危機後に拡充された備蓄が、ペルシャ湾内からの石油激減への本格的対応までの時間的猶予をもたらしている。一方、石油危機の教訓は、原油輸入先の多角化においては十分には生かされなかった。第1次石油危機時に78%であった原油輸入における中東依存度は93%に達している。

液化石油ガス(LPG)では輸入先が中東から米国へと急速に切り替わったが、LPG同様に輸入に多くを頼るナフサでは構造変化は生じなかった。当面は石油供給の多くを中東に頼る構図は変わりそうもなく、中東との関係強化には引き続き心を砕くべきである。

一方、消費エネルギー全体を見ると異なる景色が広がる。一次エネルギー供給における中東依存度は半世紀前の6割ほどから36%へ低下した。天然ガス、石炭による石油代替が大きく効いた。非化石燃料の寄与は東日本大震災後の原子力停滞が響きこれに及ばない。

図1 | 一次エネルギー供給における供給国・地域構成比[2024年度]



日本(自給率)は落ち込みをかなり取り戻しつつあり、米国はシェール革命でこの10年伸張している。オーストラリアは最大供給国で、日本の消費エネルギーの4分の1超を担う。オーストラリアは先進国として安定した体制を有し、日本への海上輸送路にホルムズ海峡やマラッカ海峡を含まない。それでも、リスクとまったく無縁というわけではない。

エネルギーの安定供給には多様性が重要である。太陽光、風力、原子力といった国産エネルギーをバランスよく伸ばすとともに、西(中東)、東(米国、カナダ)、南(オーストラリア)などからの柔軟性に富んだ、かつ戦略的な調達が必要である。